

# 萬葉に於て日本の感情を見る (十)

東京女子高等師範學校教授 石 井 庄 司

## 八、しめやかな愛情

我が背子せこはいづく行くらむおきつもの名張の山を  
今日か越ゆらむ

此の歌は、萬葉集卷一にあるもので、當麻真人たまたまのまひと麿の妻が、旅に出てるる夫の身の上を偲んで詠んだものであります。

名張は、三重縣伊賀國名張郡の山で、大和の初瀬から伊勢に通ふ道筋で、都が大和の南部即ち飛鳥地方にあつた時代には、東國へ通ふ重要な道路でありました。「おきつもの」は名張の枕詞で、その意味は古語の「かくれる」「さいふ意の」「なばる」から沖の方に生えてゐる海藻の底深く隠れてゐるさいふやうにまつたものであります。一首の大意は、わが夫は今ごろはぎのあたりを歩いて居られるでせうか。伊賀の名張山の邊を今日あたりは越えて居られるでありますかといふので、夫の留守にある妻の心情が、言外に溢れて居ります。「いづく行くらむ」「さいひ、また」今日か越ゆらむ」「さいふらむ」の繰返しは、何となくいぢらしい感情を起

させます。しんみり三旅の夫の身のまはりに思をやる妻の情がよく出てゐるのであります。

一體、この歌に詠まれてゐる夫の旅行は、都へ歸へるのか、それともこれから出かけて行くのか、どちらであるかといふことが問題になります。「行く」「さいひつても、家路をさして行くこと、即ち歸郷といふことにもなります。歸郷とすれば、もう明日か一明日は我が家に到着せられるといふので、待つ人の歸り来るよろこびの情もなるのであります。私は一首のひびきから考へて、昨日あたり我が家を出て行つた夫のことを思ひやつてゐるので、これから更に長い旅路を控へてゐるさいふやうに解したいと思ひます。そこにじんみりとした、しかもまた細やかな愛情の溢れて来ることを感ずるのであります。

當麻真人麿の妻のこの作は、萬葉集の卷四にもう一度重ねて載せてあります。卷四の方では「伊勢國に幸せる時」みやぎとあり、天皇の伊勢への行幸にお伴して行く夫のことを詠ん

だごこになつて居ります。かういふ重載ごいふごこは、萬葉集の編纂上の偶然の結果ご思はれますが、しかし一面からは、當時においてこの作が高く評價され、いはゆる人口に膾炙してゐたものであるごいふ證據にもなるご思はれます。歌ごしてもまごこに勝れた作ごいふごこが出來ます。そしてこの中に歌はれてゐる人の情が如何にもやさしく、正に日本的ごいつてもよからうご思ひます。

夫の上を思ふ妻の至情ごいふものは、ひごりこの常麻麿の妻だけに限らなかつたご見えて、萬葉集には同様の歌がいくつか載せてあります。

朝霧にぬれにし衣ほさずして一人や君が

山道越ゆらむ

これは作者は詳でないごありますが、やはり伊勢國へ行幸の折の作で、女性の歌であります。朝の霧にすつかりぬれてしまつた着物を乾かすごこもせず、うすら寒い山路を一人で越えて居られるごこであらうご、深く同情して詠んで居ります。「朝霧にぬれにし衣ほさずして」ごいふやうな細かいごころに思を馳せてゐるのは、正に日本女性の美點ご感歎させられます。

たまかつま島熊山の夕暮にひごりか君が

山道越ゆらむ

いきのをにわが念ふ君はごりがなく東の坂を

今日か越ゆらむ

二首ごも作者未詳の卷十二にある作であります。歌ひ振からいつて、やはり女性の作であり、夫の留守に詠んだものご思はれます。しめやかな感情ではあります。が、ご人の心の底にまでひびくものを持つて居ります。

吾が背子を倭へやるごさ夜ふけてあかごさ露にわが立ちぬれし

二人行けご行きすぎがたき秋山をいかにか君が

ひごり越ゆらむ

この二首は、天武天皇の皇女である大伯皇女が自分の一人の弟を見送られたごきの作であります。當時、大伯皇女は齋宮ごして伊勢にお住居でありました。そこへ御弟の大津皇子が遙々伊勢までお越しになり、御姉上に御面會の後、お歸りにならうごするごき、詠まれたもので、弟を思はせ給ふ御姉君ごしての細やかな愛情に讀者は強く泣かされるのであります。夜更けてごつそりごお發ちになる弟君を見送るため、長く外においてになりましたので、「あかごさ露にわが立ちぬれし」ごあります。また「二人行けご行き過ぎ難き秋山」ご當時の伊勢ご大和ごの交通路の難澁を思せる言葉ごあります。そこを「いかにか君がひごり越ゆらむ」であり、殆ご常麻麿の妻の心情に似たものを漂はせてゐます。當時の一般の女性の心情をこゝに遺憾なく示されて

るものと思ひます。

わが背子が着せる衣の針目落ち入りはりめにけらしな  
わが情こころさへ

萬葉集卷四に「阿部女郎歌一首」して載せてあるだけで、この歌の事情に就いては何の記載もありません。ただこの歌の次に中臣朝臣あつまひ東人あづまひといふ人が阿部女郎に贈つた歌さいふのがあり、また阿部女郎の答へた歌があります。さういふ點から考へて、この歌も中臣朝臣東人に贈つたものか考へられます。「着せる」は敬語で、「身に着けておいでになる」さいふ位の意味。わが夫が身に着けておいでになる着物の縫目の一針々々漏らすことなく念を入れて縫つてあつて、定めし我が情も深くこもつてゐるであらうさいふのであります。しめやかな愛情の中に實にねばり強いものを感ずるのであります。

今年ことしゆく新防人にびさきもりが麻あしころも肩のまよひは

誰かたれさり見む

「まよひ」は、衣服の使用の久しきため縫目のあらくなつて、破れてきたことをいひます。防人に出かけて行きますと、身の廻の世話をするものもありません。そこで定めし不自由をして居られるであらうと思ひやつたのであります。

前の歌さいひ、今の防人の歌さいひ、共に今日の皇軍の勇士たちへの心情を考へても少しも差支のないものであり、

古今にわたつて變らぬ日本女性の心情の尊さであります。

かういふ氣持を一層率直に述べたものさして防人の妻の歌が傳はつて居ります。

草枕旅のまるねの紐たえばが手てさつけろ

これの針はりも！

武藏國出身の防人の妻で、椋橋部くはしへのせま弟女あづま名まで傳へられてゐます。まことにやさしい心遣ではありませんか。萬葉時代には草深いころの一田舎であつた武藏野に住む女性の心が今もなほ生きてゐるのであります。「これの針も！」は、この針をもつてさいふこと東國方言で、「つけろ」さいふ「ろ」は今日もなほ用ひられる言葉であります。女性の言葉さしては粗野のやうであります。朴訥な眞情の窺へる言葉であります。旅行の途中、着物の紐がきれるやうなことがあつたら、これは私の手て思つて、この針でお附け下さいさいふのであります。今日も前線の兵隊さんたちに、着類を送るさき、糸いと針はりを添へることを忘れないことと思はれます。そのさき「あが手てさつけろこれの針も！」さいふ心は起りませんか。

信濃路は今のまはり道かりばねに足踏あしふみましむな

履くつはけ我がわが夫おとこ

これは卷十四、いはゆる東歌の中の歌で、特に信濃國歌しんのうたとなつて居ります。たぶん信濃國の女性の作でありませ

う。夫が木曾街道を通つて都の方へ出かける用事が出来たのでありませう。それを見送りまして、木曾街道は近頃が開かれた道で、木の切株なきがあつて危いから、けがのしないやうに、さうか履をはいてお出かけ下さいと申し出てゐるのであります。旅に出る夫への注意さして、いかにも行き届いたものであります。たいして目立ちません。華やかなものではありません。しかし日本女性の愛情はかくの如く眞實夫の身になりきつて、全く自己を忘れてゐるやうであります。かういふ歌からすぐこんな結論を出しては突飛びのやうにもきこえませうが、又萬葉時代にも氣性のはつきりした強い女性もありまして、さういふ心理を明瞭に言葉に出してゐるのであります。

今さらに何をか思はむうちなびき情は君に

よりにしものを

わが背子せこはものな思ひそ事しあらば火にも水にも

わがなげなくに

この二首は、巻四にありまして、「安倍女郎歌二首」とあるきりで、事情はよくわかりません。また安倍女郎といふ人の傳記もよくわかりません。恐らく何か事情の切迫したとき、相手の男に贈つたものと思はれます。すべて自分は、相手によつて生きてゐるさいふのであります。「火にも水にもわがなげなくに」は、いはゆる水火をも辭せざるさいふ熱

意を示したものであります。「わがなげなくに」は、私がなさいふとこはなさいふので、二重の否定で、あるさいふやうな意味になり、火にも水にも、私がないさいふ事はありませんさいふことになります。巻十六の傳説的の歌に事しあらば小泊瀬山の石城いはきにもこもらば共に

な思ひそわが背せ

さいふのがあります。萬が一にも大變な事が起りますれば、あの小泊瀬山のお墓に入るやうな事があつても、共々にまゐりませうから、さうか我が夫よ、心配をなさいますなさいふので、今のさきさほど似て居ります。夫の爲に全身全靈を捧げ、二にして一さいふ強い情熱であります。しめやかな愛情は一度溢ればかういふ奔流ほんりゅうもなるのであります。

但島皇女の作には、

人言をしげみ言痛みおのが世にあまかたいまだ渡らぬ

朝川わたる

さいふやうに、世間の人目を忍び、世の噂を氣にするやうな作と共に、また一方には

秋の田の穂向ほむきのよれる片寄かたよりに君に寄りな

言痛ことたかりとも

さいふやうな作があります。氣の弱いやうな所の中に、また恐しく氣の強い所の窺はれるのが、萬葉時代の女性の心情であり、特に愛情のあらはれであると思はれます。